

手作りの「寄席」をめぐる

大阪ガスエネルギー・文化研究所
(主任研究員) 栗本智代

はじめに

大阪で「寄席」というと、例えばサンケイホールやワッハ上方、文化会館などのホールでの催しをイメージする人も少なくないだろう。しかし実は、地域密着型の小さな寄席が意外と数多く点在している。

たまたま野田を探索した時に、そば屋の2階で開催されるという寄席にふと興味を持ち足を運んだ。客席はぎゅうぎゅう詰め。若手の時は、聞いているこちら側も半分冷や冷や、半分にやにや…。しかしトリではベテランの落語家がじっくりと聞かせる。落語家と客の距離が非常に近い。落語をはじめて身近に感じ、寄席の底知れぬ魅力を垣間見た気がした。

それぞれの「場」を創る人によりまた違った味わいがあると思い、あちこち寄席をめぐる。ここでは、中でもより地域に密着した手作り感あふれる寄席を紹介する。

おそばと落語の会

1978年頃から、落語の寄席として注目されているのが「おそばと落語の会」である。阪神電鉄野田駅から徒歩数分のところ、高架下にあるそば屋「やまがそば総本家」の二階の座敷が、毎月第三月曜の夕方以降、寄席に様変わりする。襖やテーブルが取り払われた宴会場に座布団が敷き詰められ、何十人ものお客さんが、高座を緩やかなコの字型で囲むかたちに座って待ちかねている。登壇するのは、笑福亭三喬さんを中心とした有名無名の若手落語家。五十人も座ればいっぱいになるほどの小さな空間なので、表情や声色が手にとるようにわかり、つばも飛んでくる。トリの三喬さんの噺でじっくり話芸を味わったあとは、大喜利勉強会である。それぞれの落語家さんのキャラクターが浮き彫りにされ、名前を聞いたことのない若い噺家さんでも親近感が生まれる。しかし、この会の本当のトリは、オリジナルのそばだ。プログラムが終わって1階に降りると、客全員にそばがふるまわれる。

この通称「そばの会」の世話人は、「やまがそば総本家」店長の東條利通さんである。知人が笑福亭松鶴の後援会に入っていた関係で、落語会にお弁当を提供することになったのが縁だという。「勉強するための寄席がしたいが、場所や機会がない」と若手が話すのを聞いて、自分の店でそば付きの勉強会を開くことを思いつき、松鶴師匠にお願いしに行ったという。当初は、笑福亭鶴三さん(のちの松喬)、松枝さん、呂鶴さん、後から松葉さんという落語家メンバーであった。「最初の数年は、客数も少なかったけれど、勉強会だから続いたんですね。そばのメニューも、研究を重ね、通常では出さない新しいメニューを開発しました」と東條さん。最近では毎年年末に、翌年1年分のメニューを決めるという。年間のそばメニューは、例えば、三月かき揚げ桜そば、六月蛸そば、十一月、晩秋そば…。中身は当日のお楽しみである。

二十周年を契機に、落語家さんを若手に切り替え、笑福亭三喬さんを中心に今日まですでに三百回を越えた。三喬さんは、「このそばの会は、今では大阪の中でも一番古い寄席の一つです。若手に交替するまでは通のお客さんが中心でしたが、若返って福島区の落語会

という感じになったんですね。雰囲気も明るくなって、お客様もあたたかく受け止めてくださるので、私達も実験したり稽古したりしやすいです。おそばがまたおいしいんです」と嬉しそうに話す。

ここは、落語家さんにとって、ホームグラウンド的な場所だという。大きな劇場では絶対に味わえない、この会ならではのぬくもりがある。

天五劇場

場所は、北区の天神橋筋商店街の中である。天神橋筋五丁目にある、「天五会館」を会場にした寄席が「天五劇場」だ。小さな三階建ての木造の建物で、一階で木戸銭を払い、靴を脱いで階段を上がると二階がお座敷になっている。「天五劇場」という看板、高座や紅白幕などの手作り感が、年期の入ったランマや畳とともに、訪れた人をほっとさせる。

この寄席の特徴は、なんといってもバラエティに富んだプログラムであろう。落語だけでなく、漫談や腹話術など盛りだくさんで、初心者でも気楽に聞ける。若手落語家には、客席からあたたかいつっこみが入るし、客席参加型の新作落語では、会場全員でこぶしを挙げて叫ぶという場面も。最後は豪華賞品が当たる大抽選会。小さな子供連れもウエルカムでアットホームな雰囲気であった。

天五会館に落語会が開催されたのは、一九九六年のことである。居酒屋「天満酒蔵」主人の岡正夫さんが天五商店会会長になった時、商店街活性化の一環として、落語会「天五倶楽部」を立ち上げた。もともとお店には、吉本興業を中心とした落語家や漫才師などが、常連客として通っており、大の落語好きの岡さんは、彼らの勉強会の場を設け活動を応援したいと考えた。五年後に一度見直しを図ったが、岡さんのもとに有志が集まり「天五劇場」として再スタートを切ったという。

岡さんによると、木戸銭は全て出演者へ渡し、毎回の打ち上げの料理は自前で用意している。さらに抽選会の豪華賞品も岡さんの懐から提供されている。「寄席などは損して当たり前。自分の道楽と思っています。まさにタニマチです。ありがたいことに、寄席の帰りに毎回十人位お店を利用させていただいているので、全くの出費ばかりでもないのですが」と笑顔で語る。毎回、内容をプロデュースされているのは、天五倶楽部の時から今日までほぼ毎回出演しているという桂三風さんである。「ここでは、庶民的な笑いを目指したい。劇場のようにいろんなものが出てくるという意味で、落語だけにこだわらない演芸全般をプログラムしています」と話してくれた。

天神橋筋商店街ならではの、上方の演芸文化発信気質が根付いているようだ。

なにわばなしかみなり亭

地下鉄の谷町六丁目駅からすぐの薬業年金会館のお座敷で、「なにわばなしかみなり亭」は開催されている。

もともと、空堀商店街にある「かみなり亭」という居酒屋で一九八八年にスタートした。主人である植康幸さんの同級生が、笑福亭松鶴さんや仁鶴さんと仲良しで、一門の弟子の勉強会をしようという話になり、店の奥の座敷を利用することにした。三十人入れれば一杯になる小さな畳の間が会場である。「最初は、七人しか集まりそうになかったから走り回って宣伝して子供も入れてやっと二十人くらいになりました。」と植さん。しかし、どんなに

狭くても音は三味線・太鼓の生演奏にこだわり、落語家さんの芸が間近で楽しめるという魅力、そして笑福亭仁智さんがレギュラーとして新作のネタおろしをすることにより、客数はだんだん増え、一年もしないうちに超満員状態になってしまった。そこで、一年後には、薬業年金会館館長の好意で、百人は収容できる現在の会場に移して継続しているという。

この寄席によく出ている笑福亭仁福さんは、「お客さんも、私たち落語家の性格やキャラクターをよく理解してくださってやりやすい。終わった後、必ず、かみなり亭で打ち上げをしますが、その時、お客さんも一緒に入っての飲み会になって、ほめられたり注意されたりします。大劇場でできないことがここでは挑戦できます。」と語る。

実はこの「かみなり亭」自体が、“笑い”“笑談”をテーマにした、植さんのキャラクターを生かした店づくりをしている。植さんの漫談はプロ級で、テレビにも数度出演されたほど。「大将としゃべっているうちに、元気になれる」と落ち込んだ時に通ってくる人もいるという。

穴場的な魅力のあるこのお店から、異ジャンルの上方文化の新たなコラボレーションも生まれている。観世流の森本哲郎さんと笑福亭仁智さんとが店で出会ったことから、山本能楽堂という能舞台で、能と落語の会が開催されたり、さらに落語と狂言、落語と吹奏楽という取り合わせでの催し企画も実現し、好評を得たという。

“人”“芸”そして“笑顔”の仲人である店長の心意気とそのオーラが満ちているお店の「場」の力を感じさせられた。

おわりに

ここで紹介できなかった寄席はたくさんある。例えば、キタの「太融寺寄席」、千日前の「TORII寄席」、阿部野の「田辺寄席」など、性格を異にする「場」がまだまだある。いずれも、「場」をプロデュースする人や落語家が、上方落語という文化を育て広げるため、ほとんど手弁当で支えているのがこれら地域寄席である。一方、開催が途絶えてしまった寄席もある。新作を中心とした「ごかいらく落語会」、会社帰りや食事のついでに立ち寄れる「駅寄席」など、ビルの地下やターミナルビル内でもユニークな試みがあった。今後の再開が待たれる。

もっと気楽に上方落語を味わえる機会や「場」が地域のあちこちに拡がれば、大阪がもっと楽しい街になるだろう。本来、寄席というのは、常設小屋でいつでも落語や講談などの噺会が行われており、気ままにふらりと立ち寄れるものであったが、関西にはこれまで落語の定席さえなかった。そのため、天満にできる落語の常設小屋「天満繁昌亭」に寄せる期待は大きい。多くの町衆やビジターに愛される小屋になるよう、あわせてぜひ応援していきたい。

写真 プリント 3 枚
ポジ 5 枚